

保護者対応に活かす読み合いワーク

前 川 洋 子

Make use in protector correspondence; read; work

Youko Maekawa

豊岡短期大学 論集

第 13 号 別 冊

平成 28 年 12 月 20 日 発 行

保護者対応に活かす読み合いワーク

Make use in protector correspondence; read; work

前 川 洋 子

Youko Maekawa

はじめに

子育て家庭を取り巻く社会環境の変化の中で親たちは様々な子育ての困難に直面している。育児不安・過保護・過干渉になる親から虐待にまで及んでいる。保護者や子どものおかれている現状を把握し、保育者は保育の知識や技術を基盤にソーシャルワークの技術を活かして保護者支援に努めるよう求められている。

平成13年児童福祉法改正により第18条4項に「保育士の業務は児童の保育と児童の保護者に対する保育に関する指導」と定められ「保育所保育指針解説書」に上梓されている。

第1章総則第4項には「保育所の社会的責任」とし地域ぐるみで保育所が拠点となって保護者を支える、苦情にも対応する と記されている。

指定保育士養成校では平成23年度入学生から「保育相談支援」必修科目となり、保護者対応の重要性と必然性が益々濃くなってきている。

1. 研究目的

保護者対応の必要性を学生に講義する際に、養成校の学生も核家族、地域コミュニティの希薄化、晩婚化、女性の社会進出など子育て環境

が変化する社会の中に同時期に育っている。

保育者になり、保護者対応を求められる学生も親たちと変わらない時代を過ごしているのである。効率と合理化が優先される社会において、マニュアルのようにいかない子どもに対して親の負担感は養成校の学生にも隣接する側面がある。

本研究は養成校の学生が保育者になり保護者を支援する際に保育の専門性を活かすと共に保護者の気持ちをしっかり受け止める基礎として、傾聴、共感などを体感することで保護者対応の一助になるのではないかと考えた。

筆者が実践する授業を紹介すると共に、学生が演習で何を学び感じたのか、保護者対応に活用されるのか検討することを目的とする。

2. 方法

調査対象 都内保育士養成校2年生 70名

調査時期 2015年4月～8月

調査内容 記述式アンケート

70名中65名分回収（回収率92.8%）

3. 演習

演習 (1)

担当する科目において対人的専門における保育の専門性を基盤に保護者と自身の具体的なカンセリング技術の活用を演習に取り入れた。

授業のオリエンテーションでは筆者自身の自己開示。アサーションの提示から始めた。授業の始めに緊張している学生にアイスブレイクを狙った。

演習 (2)

相手を意識しながら信頼関係を構築することを目的とした二人で目隠し歩行リレーとパスデーラインという自己紹介ゲームを行う。ノンバーバルコミュニケーション技法に関連するものである。非言語と不可視覚を体験する中で相手との距離を想像する体験を目的としたワークを行う。

演習 (3)

ふたり組をランダムに作り、学生同士が絵本の読み合いを行う。

2007村中によると「読み合いとは、絵本の中に流れる物語の力を借りて、向かいあうあなたと私が、その瞬間かけがえのない一人ひとりとして感じあえる場所になることです。読み聞かせは絵本の中に描かれていることを作者の意を汲んで忠実に届ける読書サービスだと考えられますが、読み合いは絵本の内側にたゆとう物語と読者の内側に潜む物語が毎回一度きりの出会いの中で絡まりあい、励まし合って『生きてつなぐ場』を育てていくコミュニケーションのひとつ」と述べている。

◆読み合いワークの手順

①学生は相手に読んで上げたい本を選定する



写真1

絵本選定時に学生は絵本を手にとっては「懐かしい」「これ読んだことある」などと盛り上がってしまい選定に予想外の時間がかかってしまった。筆者が「読んであげたい本を選ぶのですよ」とアナウンスしたが学生の選定基準は自分のお気に入りや思い出の絵本が多かった。

周りの学生と違うのを狙って選ぶ学生も見受けられた。また、男子学生は登場人物に男の子や男性がいる本を選ぶ傾向が見られた。

相手を思いながら相手にマッチングした本の選定よりも自身の読みやすさや興味関心を重視していることが伺える。馴れ合いの学生同士が影響して、選定場面では相手を意識することがうまくいかなかった。

②絵本を読み合う



写真2



写真4



写真3



写真5

◆学生が選定した絵本 (一部)

表 1

『お父さん お父さん』
 『なつねこ』
 『おおかみのおいしゃさん』
 『まちの犬といなかのかえる』
 『あたし、ゆきおんな』
 『かわうそ3兄弟』
 『はじめての旅』
 『ひみつのザリガニ』
 『あるひこねこね』
 『くうき』
 『はじめてのおつかい』
 『ぼくはねんちょうさん』
 『小さな死神くん』
 『ぼくのママはうんてんしさん』
 『ゆっくりおやすみ にじいろのさかな』
 『オオカミゲーのなつかしいひみつ』
 『きょうはマラカスのひ』
 『ねむくないもん』
 『おしえておしえて』
 『もったいないばあさんもりへいく』
 『あいうえおのえほん』
 『ぼくはここにいる』
 『あんちゃん』
 『あかいくつ』
 『ともだちできたよ』
 『わたしのひかり』
 『おつきさまこんばんは』
 『おふろでちゃぷちゃぷ』
 『さんぽの本』
 『おはなししましょう』
 『かえるのめだま』

③感想を記述する

◆読み手の感想 (一部)

- ・登場人物になりきって読んだ
- ・楽しかった
- ・じっくり聞かれていると緊張する
- ・字が大きくて読みやすい
- ・語りかけ・セリフは難しい
- ・文字だけでなく効果音もつければよかった
- ・早口になってしまった
- ・読むことが精一杯で内容が伝わりにくかった
- ・抑揚・強調は難しい
- ・内容が薄かった
- ・全てひらがなは読むづらい
- ・濁音が多くてリズムがとりにくい
- ・馴染み安かった
- ・本の持ち方を意識した
- ・相手の反応をみながら読むのは難しい
- ・ページをめくるタイミングが難しい

◆聞き手の感想 (一部)

- ・物語が長いと飽きてしまう
- ・聞き手はゆったりとした気分
- ・パートナーの意外な一面が見られた
- ・なぜこの本なのだろう、と思った
- ・間が空くのに違和感があった
- ・夢中で聞いた
- ・目線がずっと絵本で聞き手としては残念
- ・セリフに抑揚がなくつまらない
- ・セリフがわからない箇所がある
- ・滑舌が悪い
- ・聞き手も参加できる絵本だったのでよかった
- ・聞きやすかった
- ・ゆっくり読んでくれたのでよかった

- ・感情が入っているな、と思った
- ・一生懸命さが伝わる
- ・絵と語りのペースがずれる時が気になった
- ・ページをめくるタイミングが早い / 遅い

④互いに感想を述べ合う

⑤読み合い演習後感想を記述

◆演習後感想（一部）

- ・大勢の前よりは緊張しない
- ・互いに読み聞かせとは難しい
- ・読み合うことは読むとは違う
- ・絵本選定から相手への意識は始まっていた
- ・意外な一面がわかった
- ・読み終えた後の表情が気になる
- ・読んでいる最中の反応が気になる
- ・呼吸や間は相手に合わせるもの
- ・自分に余裕がないとできない
- ・1対1は難しい

4. 考察

読み合い演習後の感想によると学生は相手を意識しながら話す、伝えることの難しさを実感したようである。

今回のワークでは読み聞かせではなく、読み合うという関係性を体感し保護者支援に結びつけることを目的としていた。

相手に聞かせるのではなく、届ける意識が重要であること。心理的相手との距離、人間関係、基本的信頼関係の大切さを学ぶことは保育者養成に有効だと考える。互いに通じ合う心の交流に気づき、保護者を支援する者として共感、受容の大切さは揺るぎないものである。

学生は保育と対人関係における心理的支援の共通項を探りながら保育内容・技術と共に保護者支援という大人の対人関係を学んでいく。

授業アンケートの中には「私は子どもが大好きで保育は得意だが、保護者対応は専ら苦手だ」という学生もいる。発信は得意だが受け手の姿勢が未熟だと感じる学生もいる。学生の言葉の用い方の軽さは筆者が気になるところである。

読み合いワークの演習授業を行った中で養成校の学生ひとり一人が保護者支援の重要性を再考察して自身の保育技術を磨き保育の質の向上に努めていくことを期待する。

5. おわりに

今後は保護者に対する基盤として相手を尊重することから始まる来談者中心法を理解することを目的とした授業の展開を試みる予定である。今回の演習ワークより悩みや不安をしっかり受け止めて聴く受容と傾聴を実践する演習につなげていきたいと考えている。

参 考 文 献

- ¹ 厚生労働省：保育所保育指針解説書19-20 フレーベル館2013
- ² 厚生労働省：保育所保育指針解説書27-31 フレーベル館2013
- ³ 村中李衣：読み合いのワーク
平成19年度人間関係力を育む子育て環境づくり支援事業報告書「むすんでひらいて編みなおして」pp62-70公益財団法人 日本女性学習財団2007 11

